

令和3年度
駒沢女子短期大学
『保育者として働く卒業生対象のアンケート調査』
報告書

駒沢女子短期大学 自己点検・評価委員会

1. 調査概要

(1) 調査目的

本調査は、駒沢女子短期大学（保育科）の卒業生が獲得した「保育者」及び「社会人」として求められる資質・能力について、その後の経過を把握し、本学の教育活動によって得られた学修成果（教育効果）を検証することを目的とした。

(2) 調査時期：2022年1月～3月

(3) 調査対象：本学卒業後、保育者として働く経験年数5年目までの卒業生378名
※有効回答数：91名（24.07%）

(4) 調査方法：オンラインによる質問紙調査（Google Form）

2. 調査内容

(1) 卒業生の基本情報

①氏名

①経験年数：1年目～5年目（平成28年度～令和2年度に本学を卒業した卒業生）

②取得資格：幼稚園教諭二種免許状・保育士資格・取得なし

③勤務先：幼稚園・保育所・認定こども園・施設

④雇用形態：正規・契約・派遣・パート・転職予定・退職予定

(2) 「保育者」として求められる資質・能力

「教育・保育・支援の基礎知識を理解している」や「子ども（利用者）の姿を客観的に捉えることができる」、「自分で指導（支援）計画を立てることができる」など、保育者として求められる資質・能力を全21項目にまとめた自己評価式の尺度（古屋・川口・村野（2017）が本学の学生及び卒業生を対象とした調査研究において作成したもの）を使用した（P.6：表1）。

卒業生には、各項目について「今のあなたは、どの程度、発揮（実践）できると思いますか」と尋ね、4件法（「1. そう思わない」「2. そう思う」「3. とてもそう思う」「4. 非常にそう思う」）により回答するように求めた。

(3) 「社会人」として求められる資質・能力

「適切な文章表現力がある」や「正しい生活習慣が身についている」、「自分から進んで協力することができる」など、社会人として求められる資質・能力を全15項目にまとめた自己評価式の尺度（古屋・川口・村野，2017）を使用した（P.18：表2）。

卒業生には、各項目について「今のあなたは、どの程度、発揮（実践）できると思いますか」と尋ね、4件法（「1. そう思わない」「2. そう思う」「3. とてもそう思う」「4. 非常にそう思う」）により回答するように求めた。

(4) 本学の教育活動に関する意見（自由記述）

①本学の教育活動において最も印象に残っていること

②本学在学中に学修したかったこと

③卒業生を対象とした研修会『フォローアップ・セミナー』において取り扱ってほしい内容

3. 調査結果（概要）

「保育者」に求められる資質・能力、並びに、「社会人」に求められる資質・能力について、回答者全体の傾向をみると、卒業生の多くがそれぞれの資質・能力をおおむね発揮（実践）できると感じていることがうかがえた（詳細は、本報告書 P.6 及び P.18 を参照）。

特に、「保育者」に求められる資質・能力の面では、⑦子ども（利用者）との信頼関係の構築をはじめ、④子ども（利用者）の幸せの最善を考えることや、⑤子ども（利用者）の想いに共鳴すること、⑥個性を受け入れること、⑦遊びの楽しさを共有することなど、本学のディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）における『人間力』や『遊び力』に相当する資質・能力を発揮（実践）できると感じていることが分かった（P.6）。しかし、経験年数1年目の卒業生は、⑮遊び（活動）の引き出しや、⑲音楽表現・⑳造形表現に関する資質・能力を発揮できるとはあまり感じていないことが分かった。これらの結果を通して本学の教育内容をみると、令和2年度（経験年数1年目）の卒業生にとって、子どもの遊びに関する学修経験や、音楽・造形を通して自身の思いや気持ちを表現する機会が十分ではなかったことを振り返ることができる（P.14 及び P.16）。

他方、卒業生の自由記述回答を分析すると、本学の教育活動において最も印象に残っている事項としては、「身体表現発表会」や「表現系授業」が全体の半数以上を占めた。この結果は、「表現」領域を教育活動の主軸の一つに掲げている本学の特徴とも合致する（P.26）。ただし、在学中にもっと学修したかった事項としても「表現遊び」が挙げられており、卒業生にとって「表現」領域の学修が充足しているとは言い切れないことも考慮しなければならない（P.27）。この他、「特別支援」や「保護者対応」なども挙げられており、引き続き、時流を汲んだ教育内容の精選に努める必要があることがうかがえた。

※文中の⑦番号は、調査に用いた質問項目の番号を示す。

4. 調査結果（詳細）

（1）卒業生の基本情報

①経験年数

有効回答 91 件の卒業生の経験年数別内訳を図 1-1 に示す。令和 3 年度の調査では、経験年数 2 年目の卒業生が最も多く、5 年目の卒業生が最も少なかった。

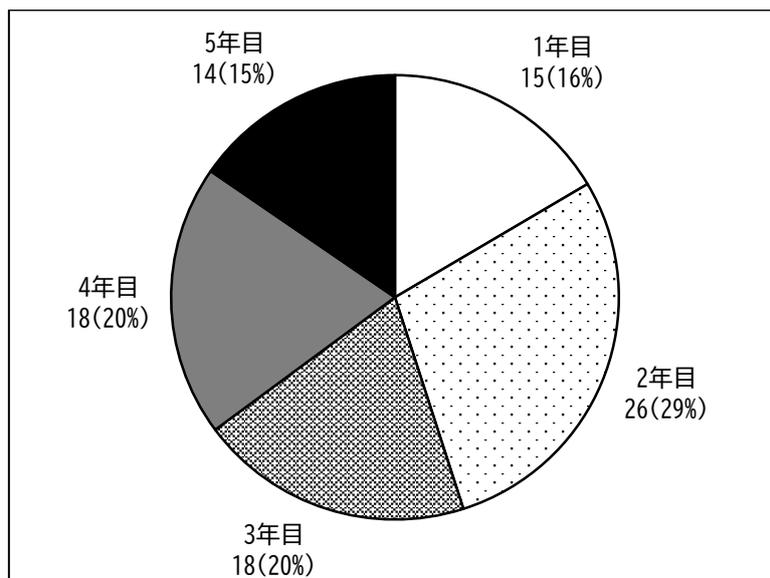


図 1-1. 卒業生の経験年数別内訳

②取得資格

有効回答 91 件の卒業生について、卒業時に取得した資格の内訳を図 1-2 に示す。本年度の調査では、幼稚園教諭二種免許状及び保育士資格の両方を取得した卒業生は 94%（85 件）であった。

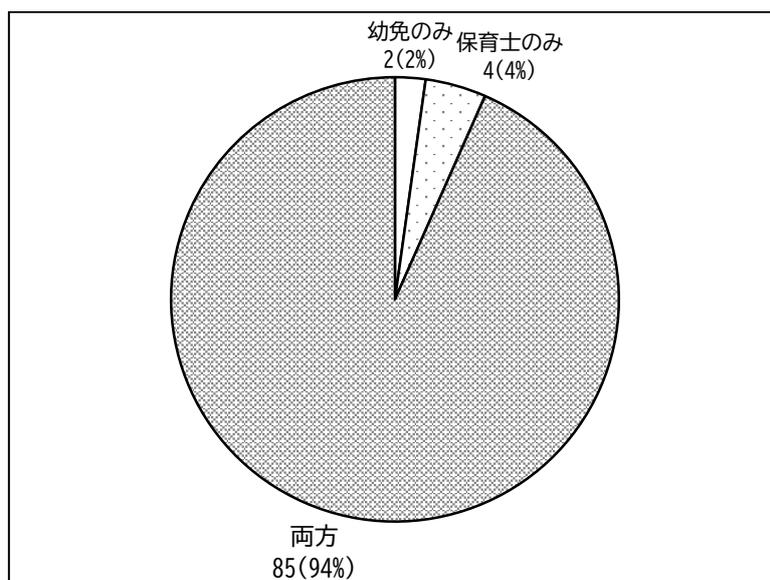


図 1-2. 卒業時における免許・資格の取得状況

③勤務先 : 幼稚園・保育所・認定こども園・施設

卒業生 91 名の現在の勤務先を尋ねたところ、保育所に勤務している卒業生が 53 名 (58%) と最も多く、幼稚園 (26 名 : 29%)、認定こども園 (9 名 : 10%)、施設 (3 名 : 3%) と続いた (図 1-3)。

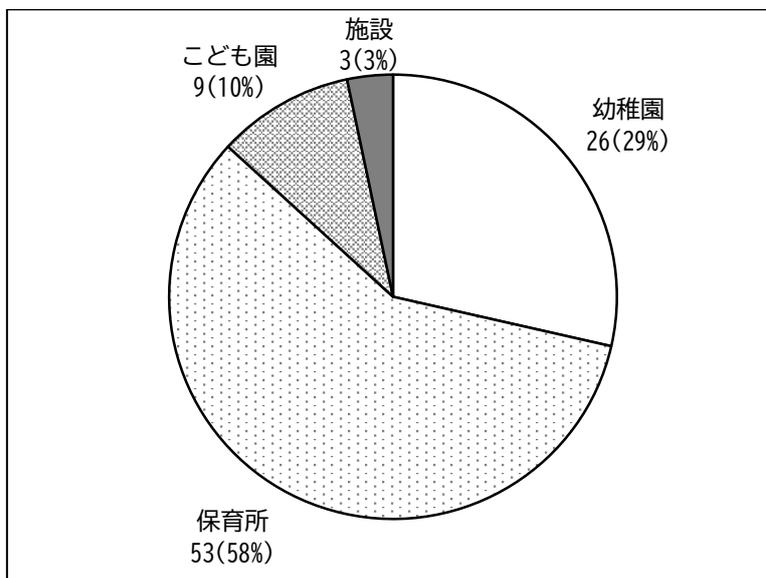


図 1-3. 卒業生の現在の勤務先

④雇用形態 : 正規・契約・派遣・パート・転職予定・退職予定

卒業生の現在の雇用形態としては、転職・退職予定者を含めると、90 名 (99%) が正規教職員として勤務していることが分かった (図 1-4)。なお、パートは 1 名 (1%) であった。

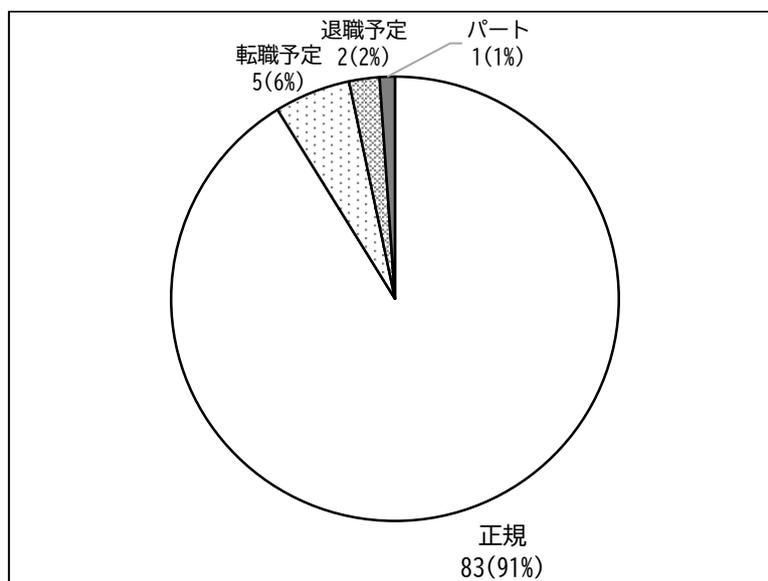


図 1-4. 卒業生の雇用形態

(2) 「保育者」として求められる資質・能力

①記述統計

「保育者」として求められる資質・能力について、表1の通り、有効回答91件全体の平均値及び標準偏差を算出した。

その結果、すべての項目が平均値2.00以上を示しており、卒業生（有効回答者）の多くが「保育者」として求められる資質・能力を発揮（実践）できると感じていることが分かった（卒業生の多くが「2. そう思う」よりも高く回答したため、平均値が2.00以上になった）。

特に、「4. 子ども（利用者）の幸せを最善に考えている」「5. 子ども（利用者）の想いに共鳴することができる」「6. 子ども（利用者）の個性を受け入れることができる」「7. 子ども（利用者）と信頼関係を築くことができる」「17. 子ども（利用者）と一緒に遊び（活動）を楽しむことができる」については、卒業生（有効回答者）の多くが「3. とてもそう思う」と回答しており（平均値が3.00以上のため）、他の項目よりも発揮（実践）できると感じていることが分かった。

これらの項目は、本学のディプロマ・ポリシーにおける『人間力』や『遊び力』に相当するものであり、本学の教育活動による学修成果（教育効果）をうかがえる。

表1. 「保育者」として求められる資質・能力の記述統計量（N = 91）

質問項目	平均値	標準偏差
1. 教育・保育・支援の意義や目的を理解している。	2.69	.69
2. 教育・保育・支援の基礎知識を理解している。	2.62	.68
3. 教育・保育・支援の基礎技能が身についている。	2.66	.70
4. 子ども（利用者）の幸せを最善に考えている。	3.33	.78
5. 子ども（利用者）の想いに共鳴することができる。	3.08	.83
6. 子ども（利用者）の個性を受け入れることができる。	3.15	.82
7. 子ども（利用者）と信頼関係を築くことができる。	3.24	.78
8. 保護者（保証人）と積極的に関わることができる。	2.92	.83
9. あらゆる人の権利を尊重することができる。	2.91	.80
10. 子ども（利用者）の姿を客観的に捉えることができる。	2.77	.75
11. 子ども（利用者）の成長課題を捉えることができる。	2.88	.80
12. 自分で指導（支援）計画を立てることができる。	2.70	.74
13. 特別な配慮が必要な子どもの特性について理解している。	2.63	.77
14. 様々な家庭環境について想像することができる。	2.73	.72
15. 様々な遊び（活動）を知っている。	2.58	.82
16. 子ども（利用者）を遊び（活動）に巻き込むことができる。	2.76	.82
17. 子ども（利用者）と一緒に遊び（活動）を楽しむことができる。	3.35	.74
18. 遊び（活動）を通して子ども（利用者）の感性を引き出すことができる。	2.84	.73
19. 自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を音楽を通して自由に表現できる。	2.33	.79
20. 自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を造形を通して自由に表現できる。	2.44	.86
21. 自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を身体を通して自由に表現できる。	2.58	.79

※平均値：「1. そう思わない」「2. そう思う」「3. とてもそう思う」「4. 非常にそう思う」

①「教育・保育・支援の意義や目的を理解している」

質問項目「教育・保育・支援の意義や目的を理解している」について、経験年数ごとの平均値を集約した結果、図 2-1 に示す通り、1 年目から 5 年目の卒業生の多くは、「2. そう思う」と感じていることが分かった（平均値が 2.00 以上のため）。

その後、調査対象となった卒業生全体を母集団と想定し、経験年数を要因とした一元配置の分散分析を行った。その結果、2 年目の卒業生の方が、1 年目の卒業生よりも平均値が高いことが分かった（ $f(4, 86)=2.71, p<.05$ ）。つまり、2 年目の卒業生の方が、1 年目の卒業生よりも、「教育・保育・支援の意義や目的を理解している」と実感していると思われた。

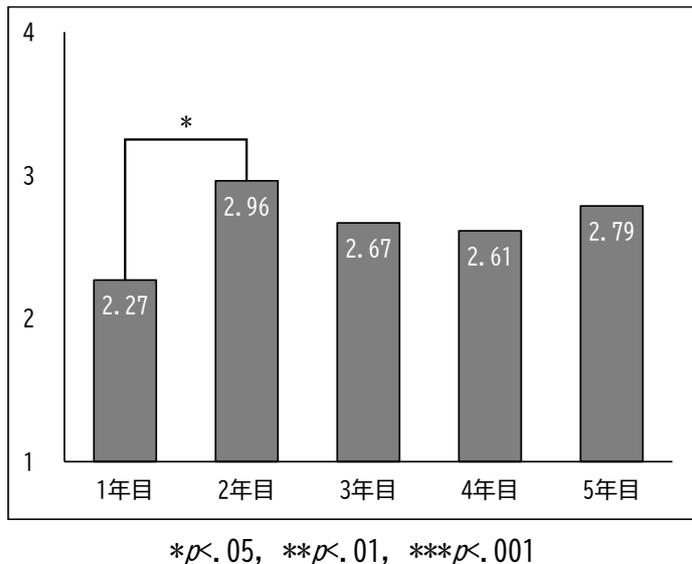


図 2-1. 「教育・保育・支援の意義や目的を理解している」経験年数ごとの平均値

②「教育・保育・支援の基礎知識を理解している」

質問項目「教育・保育・支援の基礎知識を理解している」について、経験年数ごとの平均値を集約した結果、1 年目から 5 年目の卒業生の多くが、「2. そう思う」と感じていることが分かった。しかし、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-2）。

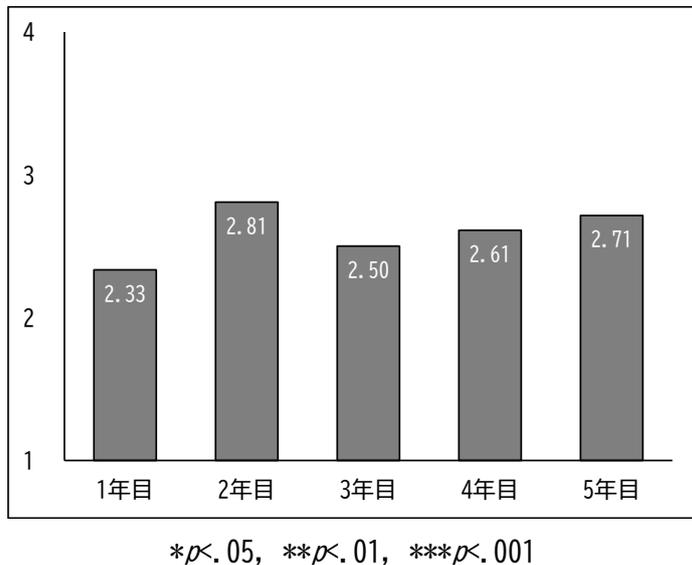


図 2-2. 「教育・保育・支援の基礎知識を理解している」経験年数ごとの平均値

③「教育・保育・支援の基礎技能が身についている」

質問項目「教育・保育・支援の基礎技能が身についている」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-3）、2 年目の卒業生の方が、1 年目の卒業生よりも、「教育・保育・支援の基礎技能が身についている」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=1.40, p<.05$ ）。

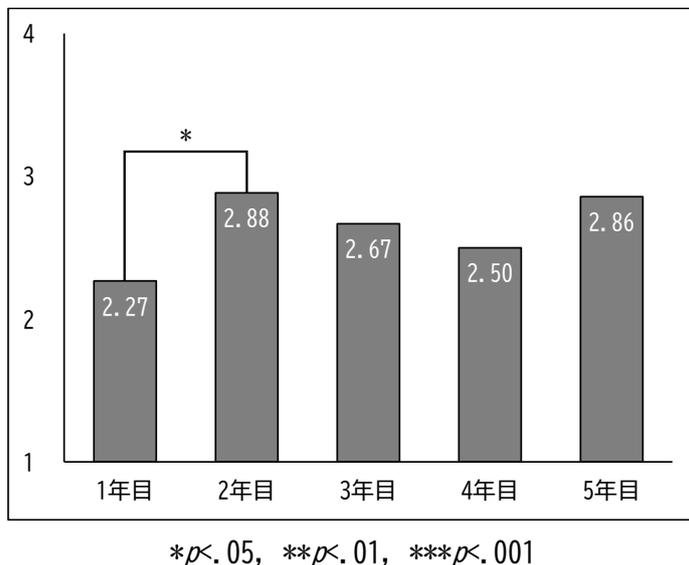


図 2-3. 「教育・保育・支援の基礎技能が身についている」経験年数ごとの平均値

④「子ども（利用者）の幸せを最善に考えている」

質問項目「子ども（利用者）の幸せを最善に考えている」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-4）、経験年数 5 年目と 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「子ども（利用者）の幸せを最善に考えている」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=3.42, p<.05$ ）。

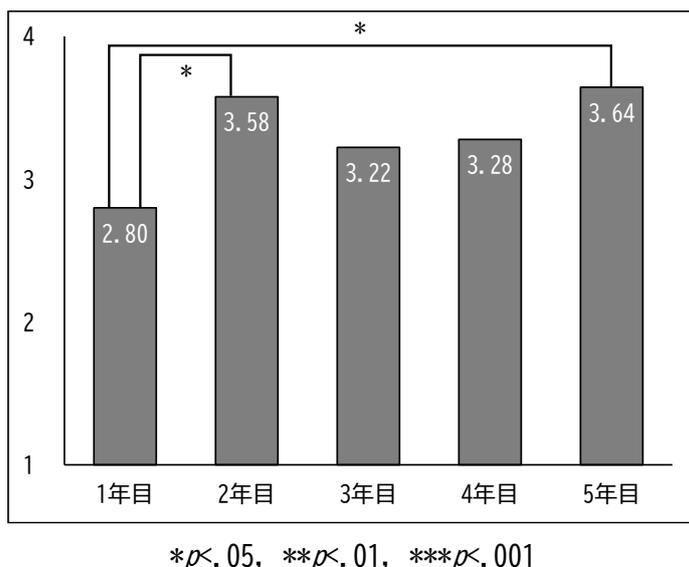


図 2-4. 「子ども（利用者）の幸せを最善に考えている」経験年数ごとの平均値

⑤ 「子ども（利用者）の思いに共鳴することができる」

質問項目「子ども（利用者）の思いに共鳴することができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-5）、経験年数 5 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「子ども（利用者）の思いに共鳴することができる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=3.11, p<.05$ ）。

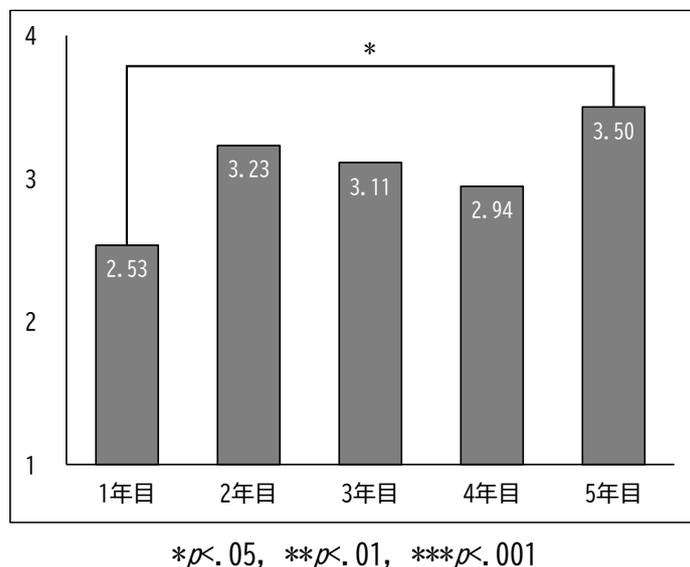


図 2-5. 「子ども（利用者）の思いに共鳴することができる」経験年数ごとの平均値

⑥ 「子ども（利用者）の個性を受け入れることができる」

質問項目「子ども（利用者）の個性を受け入れることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-6）。

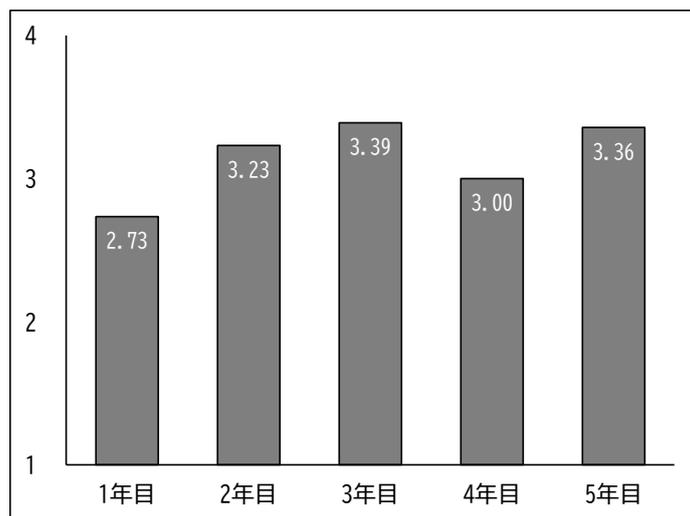


図 2-6. 「子ども（利用者）の個性を受け入れることができる」経験年数ごとの平均値

⑦「子ども（利用者）と信頼関係を築くことができる」

質問項目「子ども（利用者）と信頼関係を築くことができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-7）。

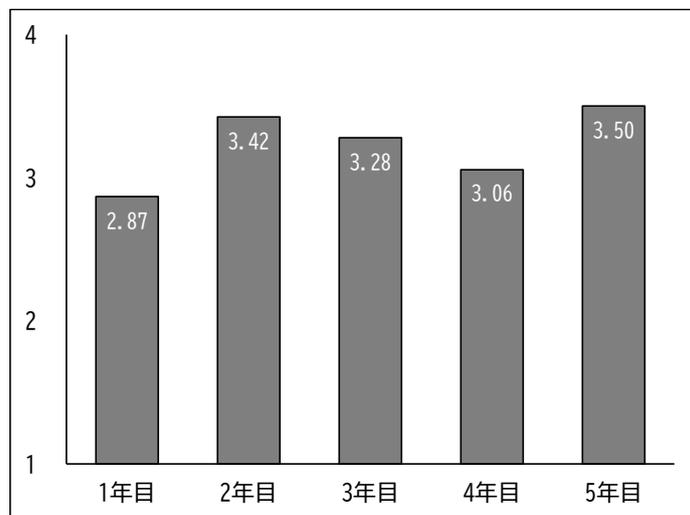


図 2-7. 「子ども（利用者）と信頼関係を築くことができる」経験年数ごとの平均値

⑧「保護者（保証人）と積極的に関わることができる」

質問項目「保護者（保証人）と積極的に関わることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-8）。

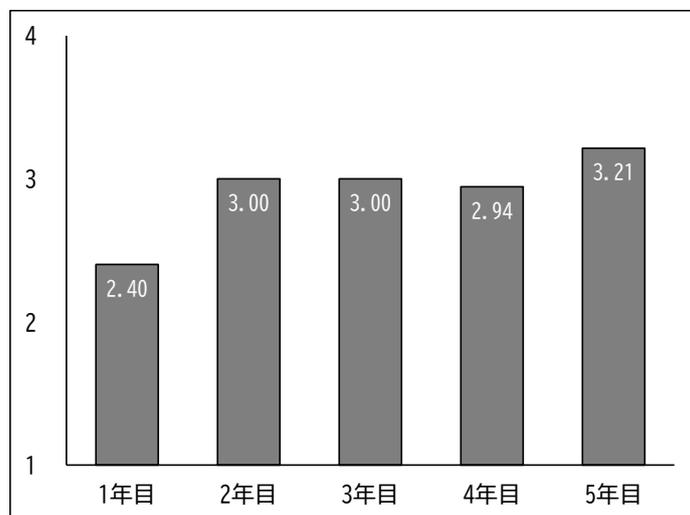


図 2-8. 「保護者（保証人）と積極的に関わることができる」経験年数ごとの平均値

⑨「あらゆる人の権利を尊重することができる」

質問項目「あらゆる人の権利を尊重することができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図2-9）。

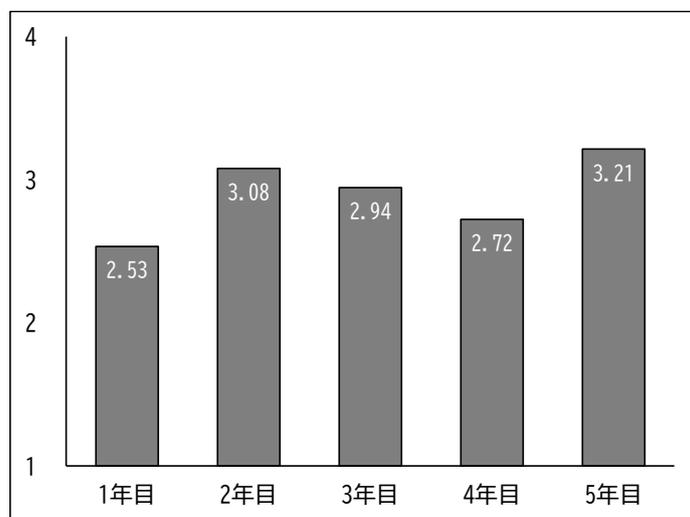


図2-9.「あらゆる人の権利を尊重することができる」経験年数ごとの平均値

⑩「子ども（利用者）の姿を客観的に捉えることができる」

質問項目「子ども（利用者）の姿を客観的に捉えることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図2-10）。

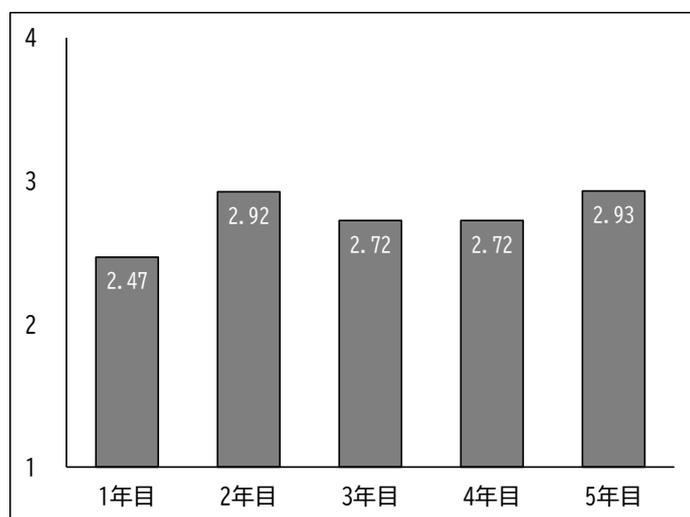


図2-10.「子ども（利用者）の姿を客観的に捉えることができる」経験年数ごとの平均値

⑪ 「子ども（利用者）の成長課題を捉えることができる」

質問項目「子ども（利用者）の成長課題を捉えることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-11）。

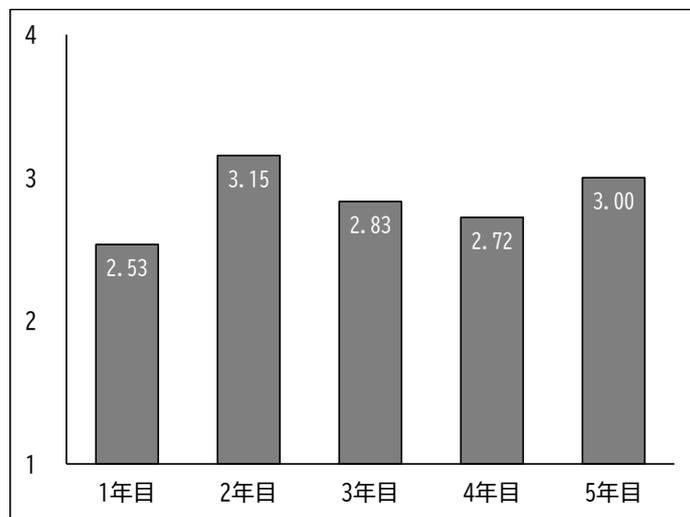
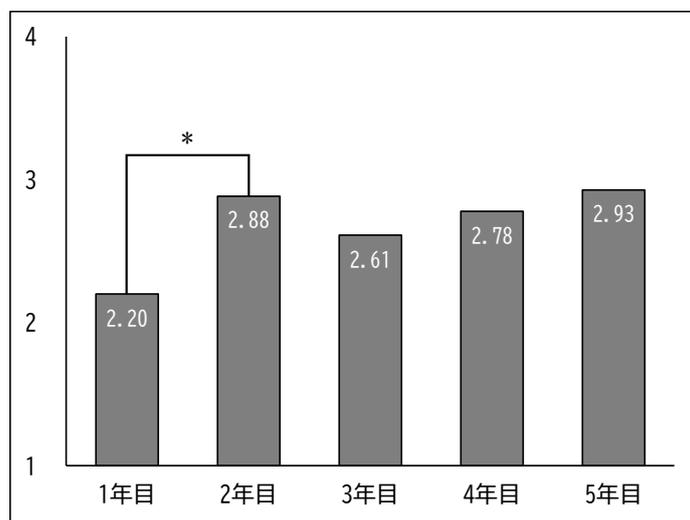


図 2-11. 「子ども（利用者）の成長課題を捉えることができる」経験年数ごとの平均値

⑫ 「自分で指導（支援）計画を立てることができる」

質問項目「自分で指導（支援）計画を立てることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-12）、経験年数 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「自分で指導（支援）計画を立てることができる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=2.78, p<.05$ ）。



* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

図 2-12. 「自分で指導（支援）計画を立てることができる」経験年数ごとの平均値

⑬ 「特別な配慮が必要な子どもの特性について理解している」

質問項目「特別な配慮が必要な子どもの特性について理解している」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-13）。

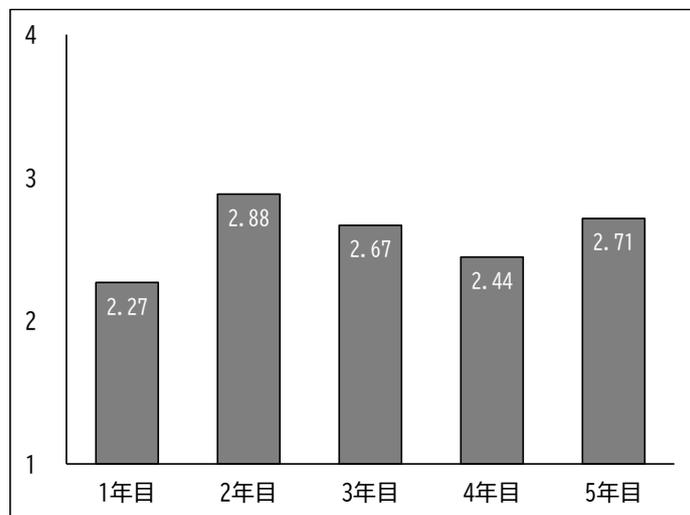
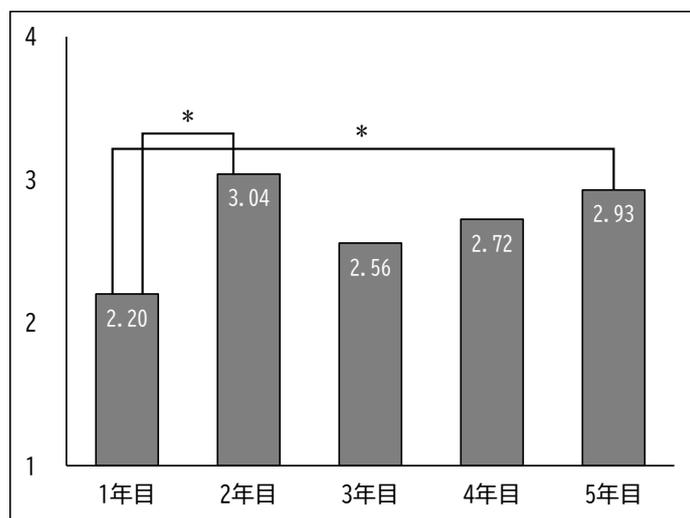


図 2-13. 「特別な配慮が必要な子どもの特性について理解している」経験年数ごとの平均値

⑭ 「様々な家庭環境について想像することができる」

質問項目「様々な家庭環境について想像することができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-14）、経験年数 5 年目及び 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「様々な家庭環境について想像することができる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=4.37, p<.01$ ）。



* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

図 2-14. 「様々な家庭環境について想像することができる」経験年数ごとの平均値

⑮ 「様々な遊び（活動）を知っている」

質問項目「様々な遊び（活動）を知っている」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-15）、経験年数 5 年目及び 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「様々な遊び（活動）を知っている」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=3.86, p<.01$ ）。特に、1 年目の卒業生は、平均値も 1.93 と低く（1 年目の卒業生の多くが「1. そう思わない」と答えたため）、子どもの遊びに関する学びを補完する必要があると考えられた。

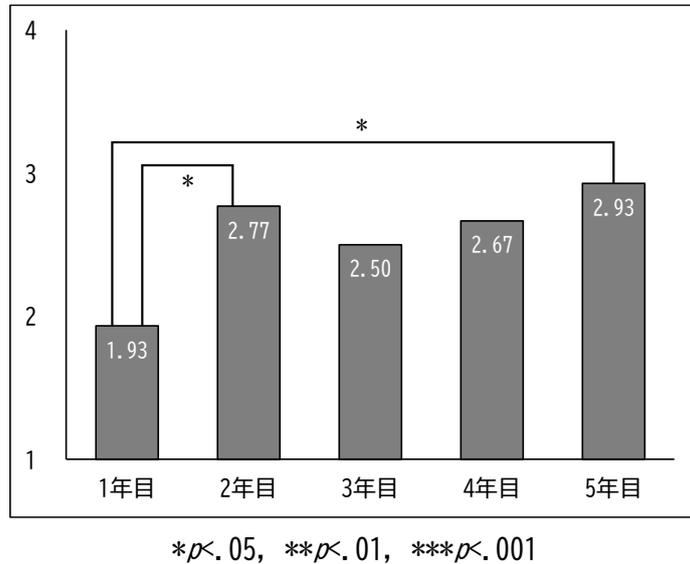


図 2-15. 「様々な遊び（活動）を知っている」経験年数ごとの平均値

⑯ 「子ども（利用者）を遊び（活動）に巻き込むことができる」

質問項目「子ども（利用者）を遊び（活動）に巻き込むことができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-16）、経験年数 5 年目及び 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「子ども（利用者）を遊び（活動）に巻き込むことができる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=4.61, p<.01$ ）。

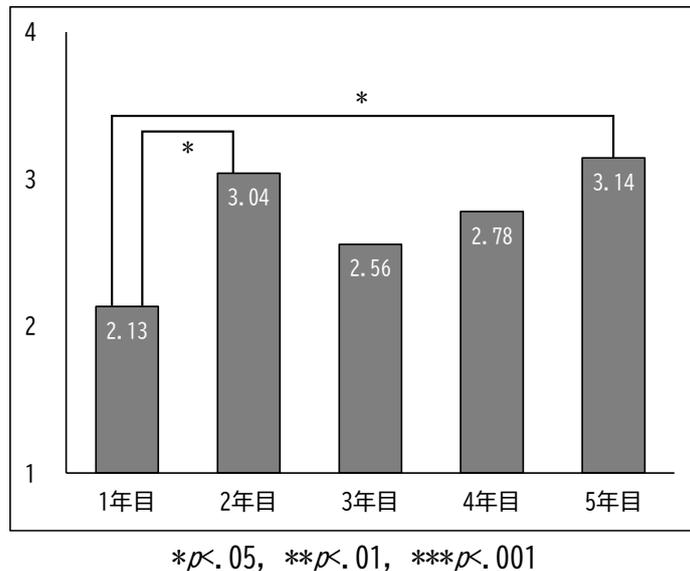


図 2-16. 「子ども（利用者）を遊び（活動）に巻き込むことができる」経験年数ごとの平均値

⑰ 「子ども（利用者）と一緒に遊び（活動）を楽しむことができる」

質問項目「子ども（利用者）と一緒に遊び（活動）を楽しむことができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 2-17）。

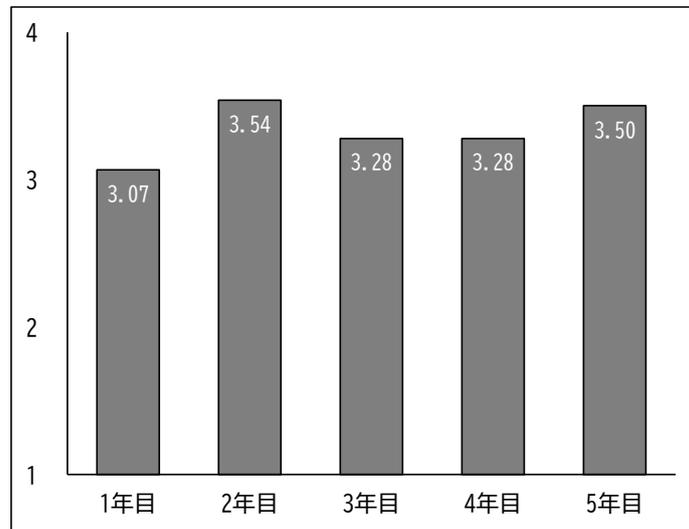


図 2-17. 「子ども（利用者）と一緒に遊び（活動）を楽しむことができる」経験年数ごとの平均値

⑱ 「遊び（活動）を通して子ども（利用者）の感性を引き出すことができる」

質問項目「遊び（活動）を通して子ども（利用者）の感性を引き出すことができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-18）、経験年数 5 年目及び 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「遊び（活動）を通して子ども（利用者）の感性を引き出すことができる」と感じていることが分かった ($f(4, 86)=4.13, p<.01$)。

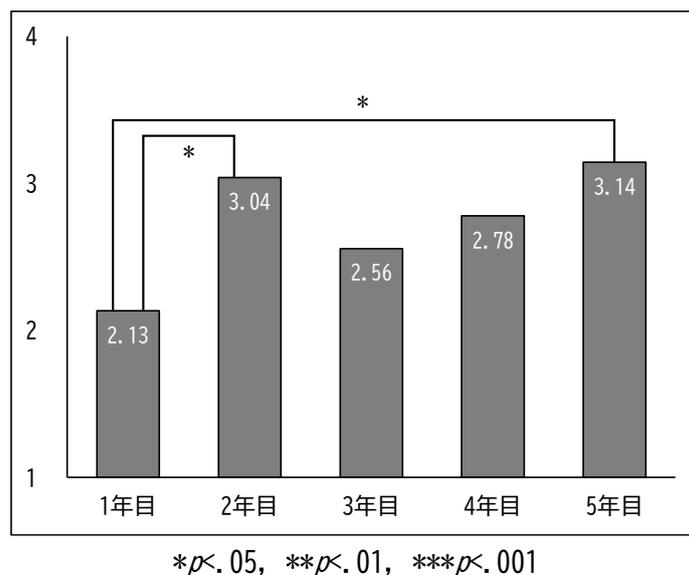


図 2-18. 「遊び（活動）を通して子ども（利用者）の感性を引き出すことができる」経験年数ごとの平均値

⑱「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を音楽を通して自由に表現できる」

経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-19）、経験年数 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を音楽を通して自由に表現できる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=2.82, p<.05$ ）。特に、1 年目の卒業生の平均値は 1.93 と低く、自分の思いや気持ちを音楽を通して表現する機会を補完する必要があると考えられた。

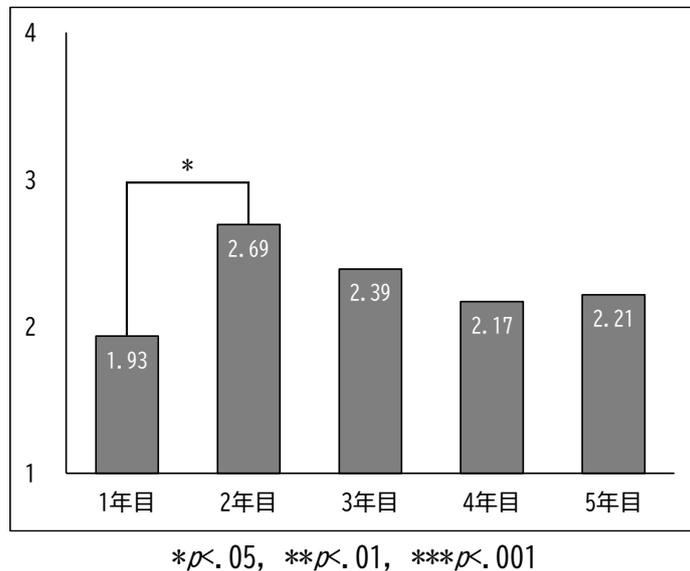


図 2-19. 「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を音楽を通して自由に表現できる」経験年数ごとの平均値

⑳「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を造形を通して自由に表現できる。」

経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-20）、経験年数 4 年目と 2 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を造形を通して自由に表現できる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=5.79, p<.01$ ）。特に、1 年目の卒業生の平均値は 1.73 と低く、自分の思いや気持ちを造形を通して表現する機会を補完する必要があると考えられた。

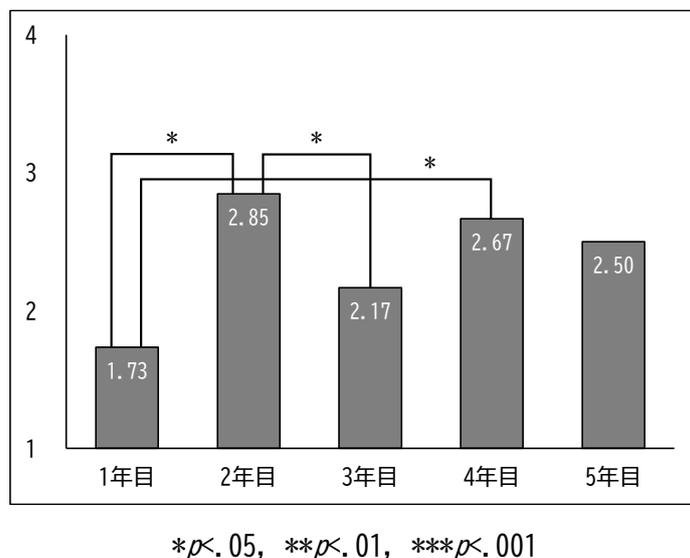


図 2-20. 「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を造形を通して自由に表現できる」経験年数ごとの平均値

⑳ 「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を身体を通して自由に表現できる」

質問項目「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を身体を通して自由に表現できる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果（図 2-21）、経験年数 4 年目の卒業生は、1 年目の卒業生よりも、「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を身体を通して自由に表現できる」と感じていることが分かった（ $f(4, 86)=3.45$, $p<.05$ ）。

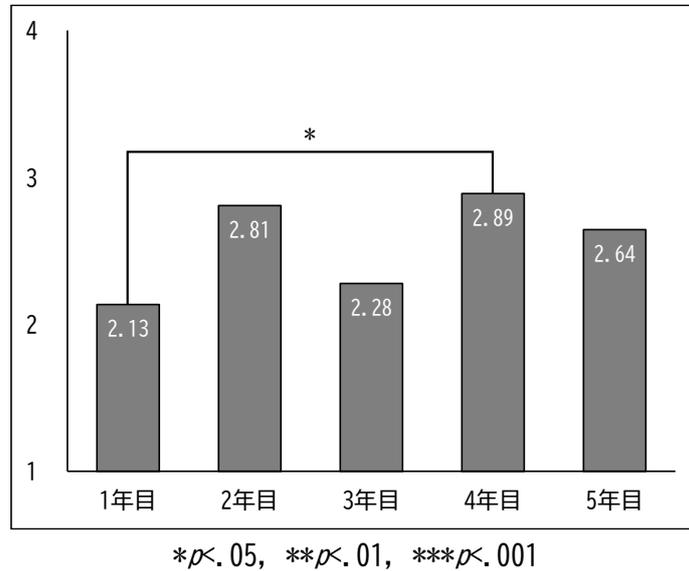


図 2-21. 「自分の感じたこと（思考や気持ちなど）を身体を通して自由に表現できる」経験年数ごとの平均値

(3) 「社会人」として求められる資質・能力

①記述統計

「社会人」として求められる資質・能力について、表2の通り、有効回答91件全体の平均値及び標準偏差を算出した。

その結果、すべての項目が平均値2.00以上を示しており、卒業生（有効回答者）の多くが「社会人」として求められる資質・能力を実践できていると感じていることが分かった（卒業生の多くが「2. そう思う」よりも高く回答したため、平均値が2.00以上になった）。

表2. 「社会人」として求められる資質・能力の記述統計量（N = 91）

質問項目	平均値	標準偏差
1. 適切な文章表現力がある。	2.43	.73
2. 豊かな語彙力がある。	2.25	.78
3. 正しい生活習慣が身についている。	2.92	.87
4. 自分の心身の健康管理ができる。	2.79	.88
5. 社会の出来事に関心がある。	2.45	.76
6. 自然に興味・関心がある。	2.74	.74
7. 自然や美しいものに感動する心をもっている。	2.97	.82
8. 積極性がある。	2.52	.85
9. 前向きに物事を捉えることができる。	2.52	.83
10. 物事を客観的に捉えることができる。	2.58	.73
11. 物事の問題や課題に気づくことができる。	2.56	.75
12. 人の気持ちを考えることができる。	2.88	.81
13. 他者と積極的に関わることができる。	2.77	.87
14. 他者を思いやる気持ちがある。	2.98	.80
15. 自分から進んで協力することができる。	2.88	.79

※平均値：「1. そう思わない」「2. そう思う」「3. とてもそう思う」「4. 非常にそう思う」

①「適切な文章表現力がある」

質問項目「適切な文章表現力がある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図3-1）。

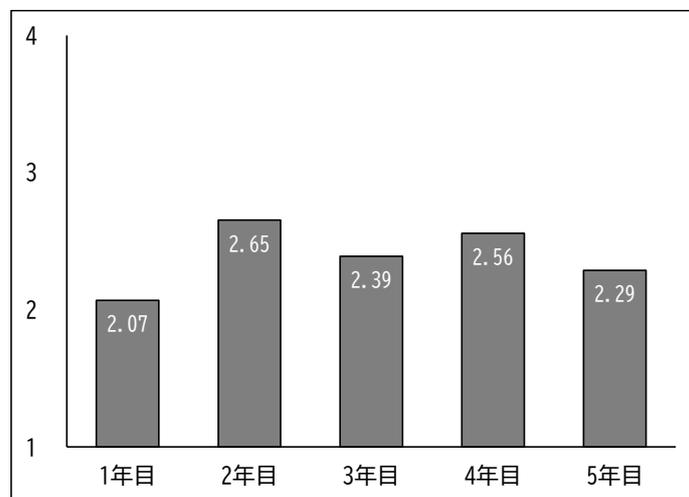


図3-1. 「適切な文章表現力がある」経験年数ごとの平均値

② 「豊かな語彙力がある」

質問項目「豊かな語彙力がある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-2）。

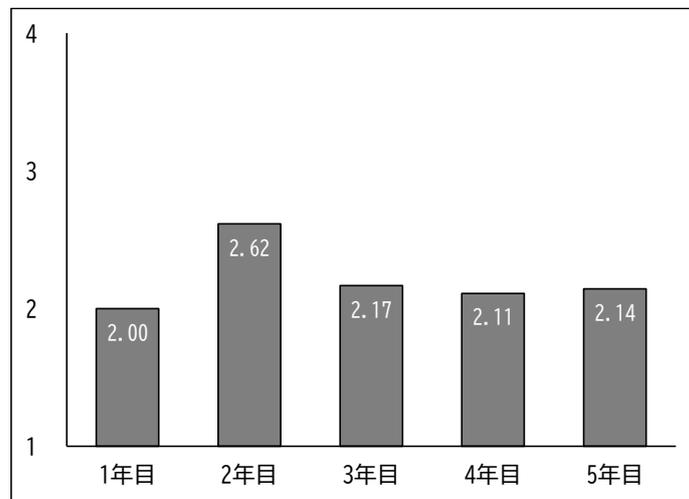


図 3-2. 「豊かな語彙力がある」経験年数ごとの平均値

③ 「正しい生活習慣が身についている」

質問項目「正しい生活習慣が身についている」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-3）。

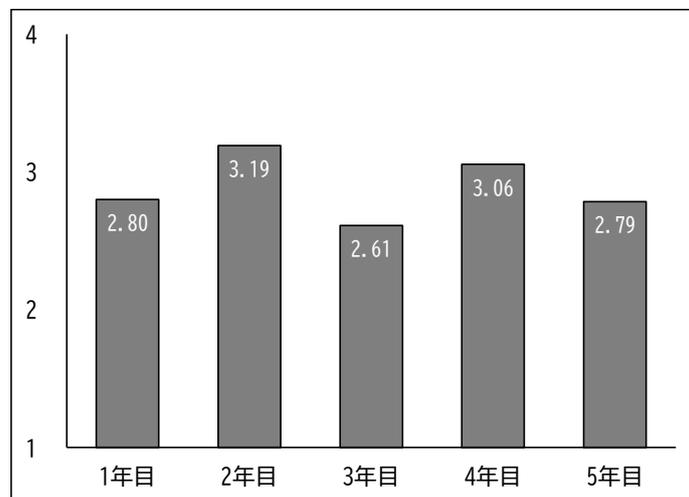


図 3-3. 「正しい生活習慣が身についている」経験年数ごとの平均値

④「自分の心身の健康管理ができる」

質問項目「自分の心身の健康管理ができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-4）。

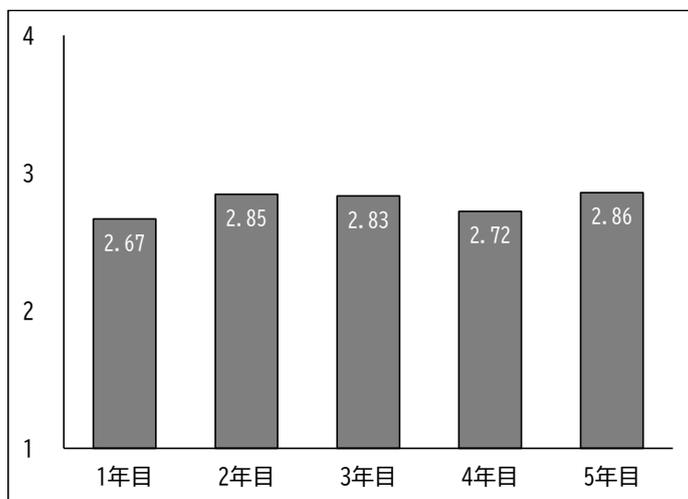


図 3-4. 「自分の心身の健康管理ができる」経験年数ごとの平均値

⑤「社会の出来事に関心がある」

質問項目「社会の出来事に関心がある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-5）。

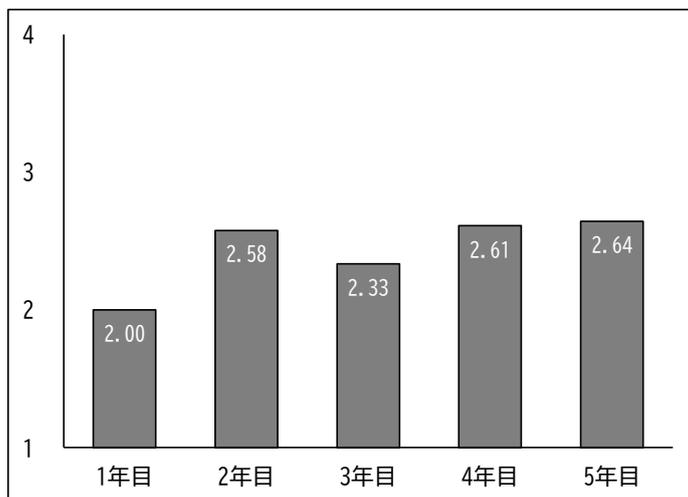


図 3-5. 「社会の出来事に関心がある」経験年数ごとの平均値

⑥ 「自然に興味・関心がある」

質問項目「自然に興味・関心がある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-6）。

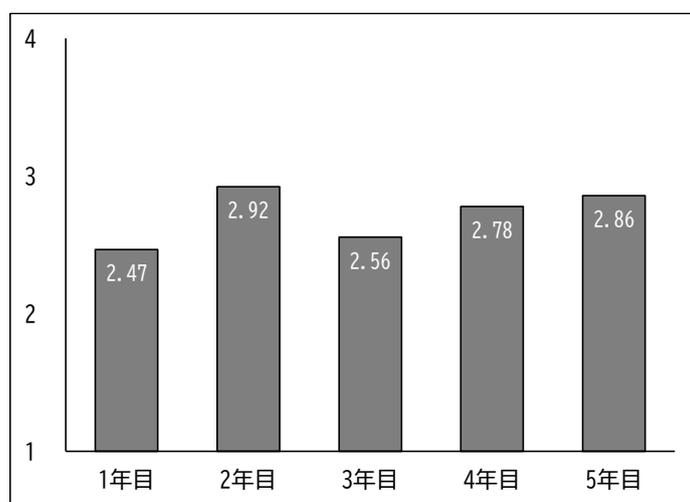


図 3-6. 「自然に興味・関心がある」経験年数ごとの平均値

⑦ 「自然や美しいものに感動する心をもっている」

質問項目「自然や美しいものに感動する心をもっている」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-7）。

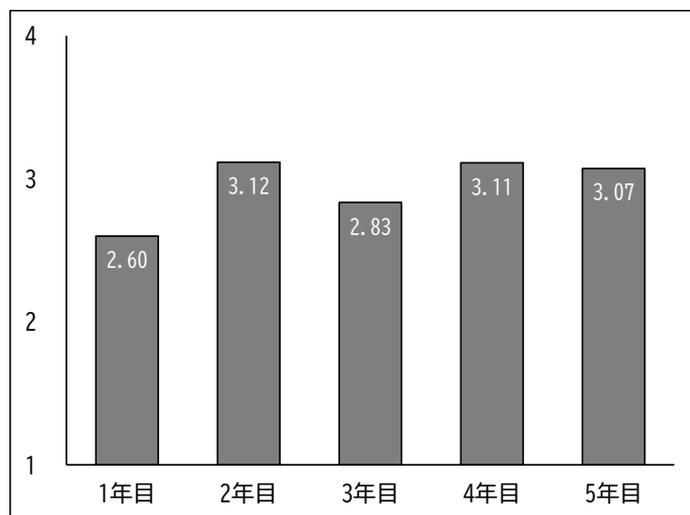


図 3-7. 「自然や美しいものに感動する心をもっている」経験年数ごとの平均値

⑧「積極性がある」

質問項目「積極性がある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-8）。

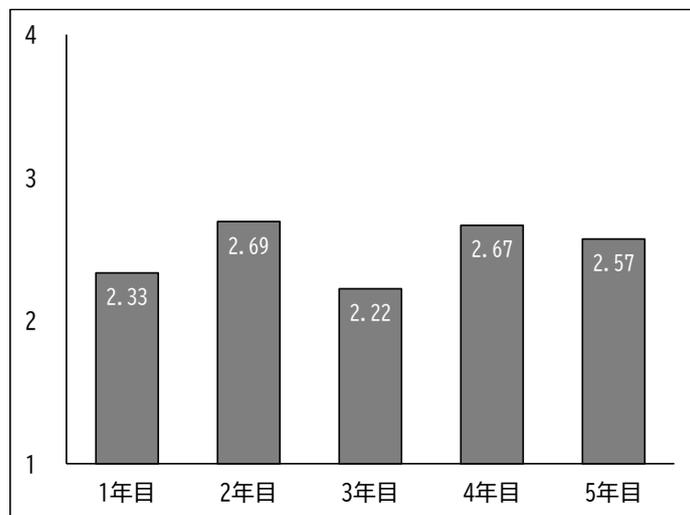


図 3-8. 「積極性がある」経験年数ごとの平均値

⑨「前向きに物事を捉えることができる」

質問項目「前向きに物事を捉えることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-9）。

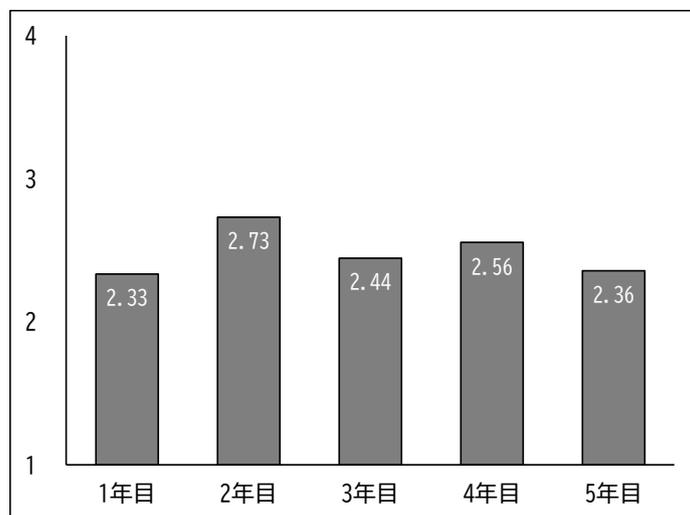


図 3-9. 「前向きに物事を捉えることができる」経験年数ごとの平均値

⑩「物事を客観的に捉えることができる」

質問項目「物事を客観的に捉えることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-10）。

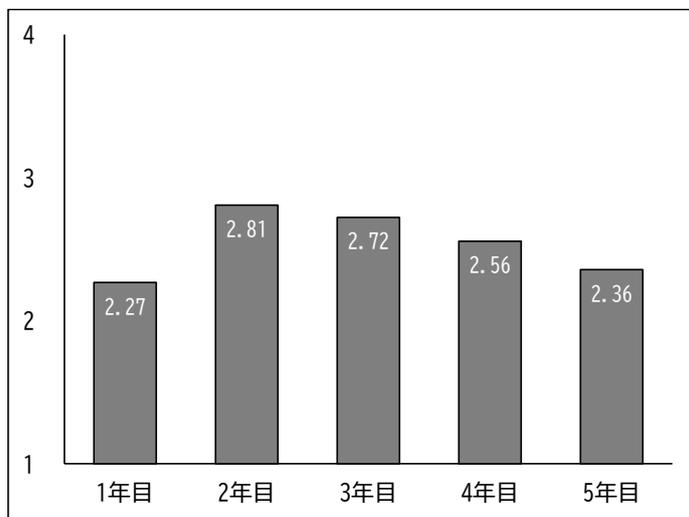


図 3-10. 「物事を客観的に捉えることができる」経験年数ごとの平均値

⑪「物事の問題や課題に気づくことができる」

質問項目「物事の問題や課題に気づくことができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-11）。

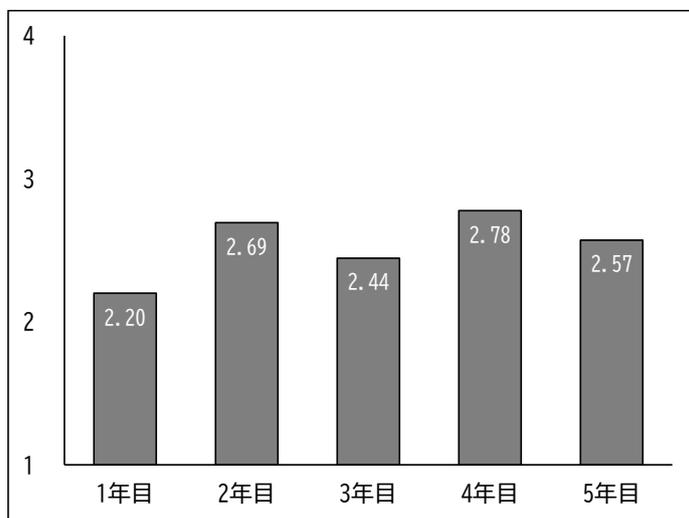


図 3-11. 「物事の問題や課題に気づくことができる」経験年数ごとの平均値

⑫ 「人の気持ちを考えることができる」

質問項目「人の気持ちを考えることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-12）。

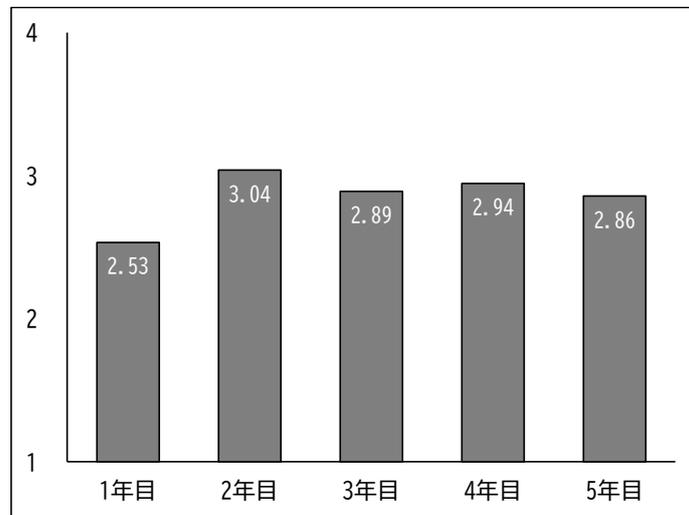


図 3-12. 「人の気持ちを考えることができる」経験年数ごとの平均値

⑬ 「他者と積極的に関わることができる」

質問項目「他者と積極的に関わることができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-13）。

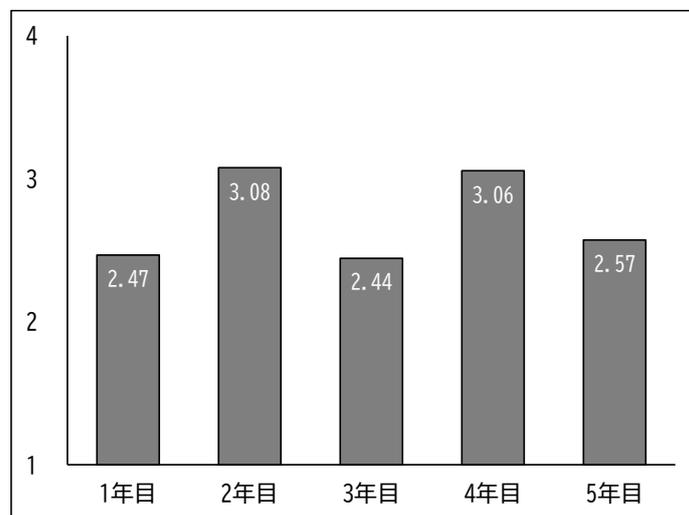


図 3-13. 「他者と積極的に関わることができる」経験年数ごとの平均値

⑭ 「他者を思いやる気持ちがある」

質問項目「他者を思いやる気持ちがある」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-14）。

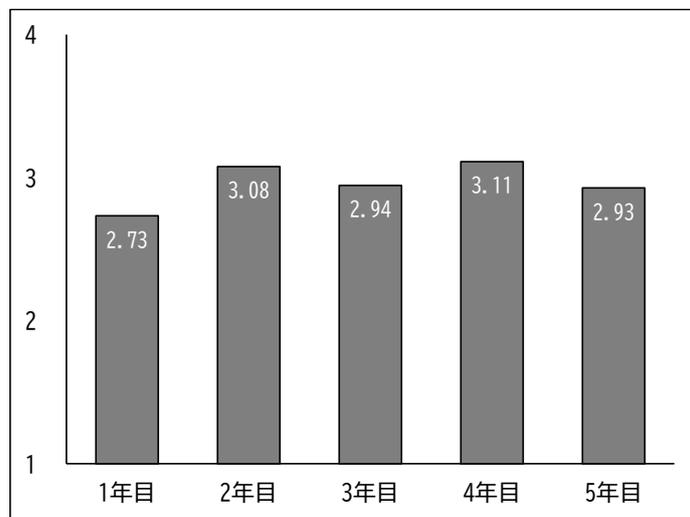


図 3-14. 「他者を思いやる気持ちがある」経験年数ごとの平均値

⑮ 「自分から進んで協力することができる」

質問項目「自分から進んで協力することができる」について、経験年数ごとの平均値の差異を分析した結果、経験年数による平均値の統計的差異は見られなかった（図 3-15）。

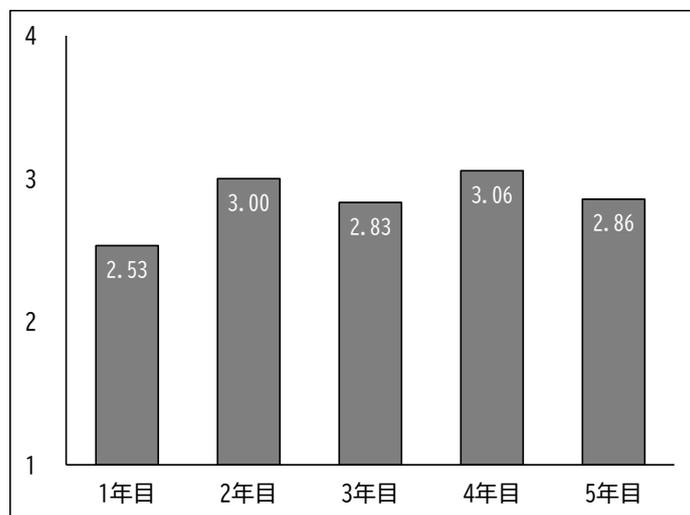


図 3-15. 「自分から進んで協力することができる」経験年数ごとの平均値

(4) 本学の教育活動に関する意見（自由記述）

①「本学の教育活動において最も印象に残っていること」

卒業生には、本学の教育活動において最も印象に残っている事柄についても尋ねた。

その結果、有効回答 79 件の内、最も回答が多かったのが「身体表現発表会」であり、次いで「表現系授業」「実習」「実践演習」と続いた（図 4-1）。

やはり、本学を代表する学校行事であり、長時間の準備を要する「身体表現発表会」が最も印象に残っている卒業生が多い。また、3つの領域（音楽・造形・身体）を擁する表現系授業についても同様である。これは、「表現」領域の学修を主軸の一つとしている本学の特徴と合致する結果と考えることもできる。

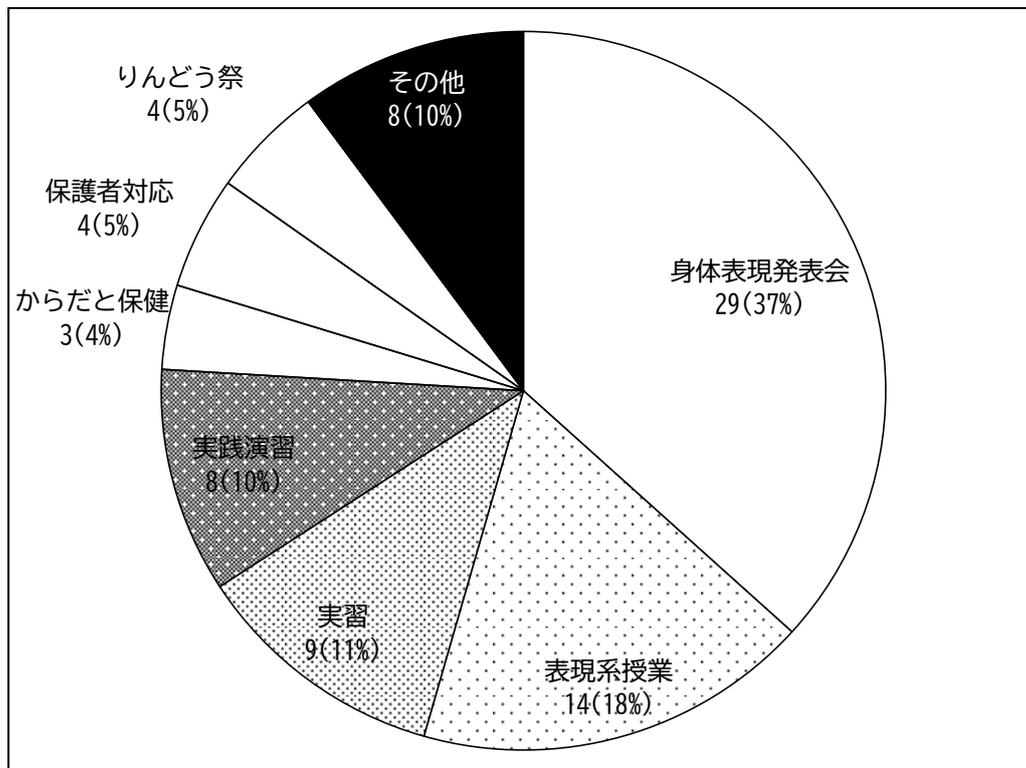


図 4-1. 本学の教育活動において最も印象に残っている事柄の内訳

【回答例】

- ・身体表現発表会：身体表現発表会，表現発表会
- ・表現系授業：音楽基礎（ピアノ演奏法），造形，リトミック
- ・実習：教育実習，保育実習，施設実習，日誌
- ・実践演習：保育・教職実践演習，焼き芋大会，運動会
- ・からだと保健：子どものからだと保健
- ・保護者対応：保護者対応のロールプレイ
- ・りんどう祭：りんどう祭，ダンボール制作展
- ・その他：座禅体験，こまざわ幼稚園，英語，心理学，海外研修，手作り教材，火起こし

②「本学在学中にもっと学修したかったこと」

また、本学在学中にもっと学修したかったことを尋ねた結果、図 4-2 の通りとなった。

最も回答が多かったのは「表現遊び」であり、「自然遊び」「遊び」と続いた。遊びに関する回答は、全体の約 4 割を占めている。これ以外の回答としては、「特別支援」や「保護者対応」、「援助方法」「書き物」が挙げられた。

先述の通り、「表現」領域に関する活動の印象が強く残っている反面、それらの学修をさらに望む声が多いことも分かった。この他、特別な支援を要する子どもの支援や保護者対応など時流を汲んだ学修内容も挙げられている。

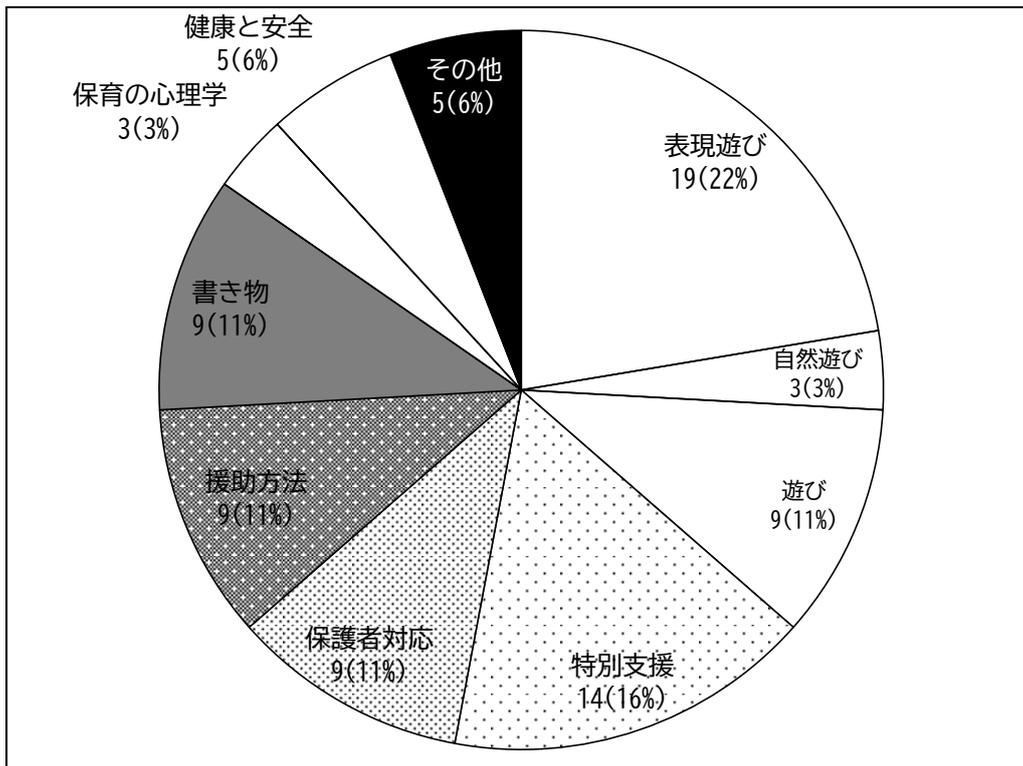


図 4-2. 本学在学中にもっと学修したかった事柄の内訳

【回答例】

- ・表現遊び：造形，玩具づくり，リズム遊び，リトミック，楽器遊び，手遊びなど
- ・自然遊び：自然遊び，自然
- ・遊び：子どもの遊び，子どもと実際に遊ぶ活動，絵本の読み聞かせ
- ・特別支援：特別な支援を要する子どもの支援方法，虐待などへの対応方法
- ・保護者対応：保護者との関わり方，保護者支援
- ・援助方法：生活の援助，遊びの選び方・引き出し方・発展方法，環境構成，乳児保育など
- ・書き物：文章力，連絡帳の書き方，要録の書き方
- ・保育の心理学：子どもの発達，子どもの心理
- ・健康と安全：病気，嘔吐処理，怪我対応，避難訓練，不審者対応
- ・その他：幼児体育，第二外国語，パソコンの使い方，社会人マナー，学生と社会人との違い

③「卒業生を対象とした研修会『フォローアップ・セミナー』において取り扱ってほしい内容」

②の質問と重複する結果も見られるが、卒業生を対象とした『フォローアップ・セミナー』において最も取り扱ってほしい内容としては、「特別支援」が挙げられた（図 4-3）。特別な支援を要する子どもとの関わり方と共に、保護者への伝え方などの「保護者支援」を挙げる卒業生もいた。

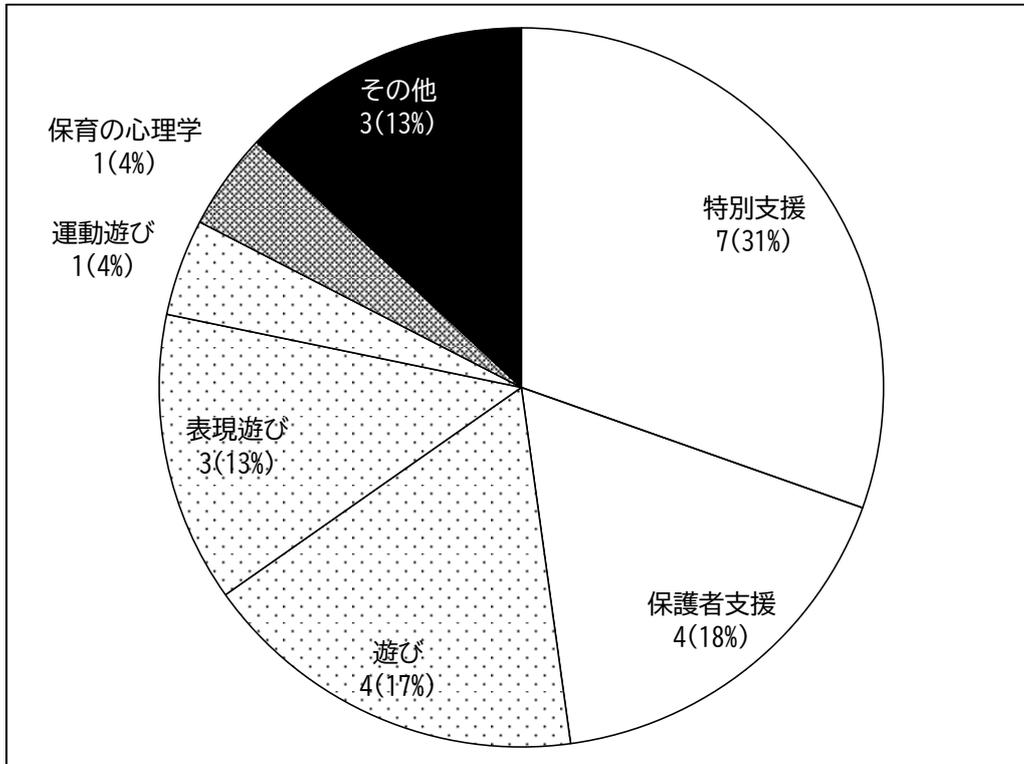


図 4-3. 『フォローアップ・セミナー』において取り扱ってほしい内容の内訳

【回答例】

- ・特別支援：特別な支援を要する子どもへの関わり方，発達支援
- ・保護者支援：特別な支援を要する子どもの保護者との関わり方，子育て支援
- ・遊び：子どもの遊び，環境構成，絵本
- ・表現遊び：リトミック，手遊び，光のアート
- ・運動遊び：運動遊び
- ・保育の心理学：年齢ごとの子どもの課題
- ・その他：近年の保育，海外の保育，学生と社会人との違い

④「その他、本学の教育活動に対する意見等」

この他、本学の教育活動に対する意見等として、以下の3点が挙げられた。

「こまじょの実習生は印象が良い。覇気や積極性がある学生を見るとこまじょらしさを感じる」

「一年生の実習前に怖がらせるような言い方をしないでほしい。自分らしさを発揮できなかった」

「人前に立つという機会が授業内で多かった方ではあるが、もっと増やして慣れる経験が大切だと現場に出てからつくづく思う」

以上